

中学生の対人能力に影響を与えるもの ——保護者とのコミュニケーションと授業形式の効果に着目して——

富永 愛子 (東京大学教育学部)

◆ 要約

- ◎保護者とのコミュニケーションをとることは、中学生の友人関係における対人能力（意思伝達力・協調性）を高める。
- ◎議論や発表を行う授業を多く受けている生徒は、意思伝達力が高く、グループで協力して課題に取り組む授業を多く受けている生徒は、意思伝達力や協調性が高い。
- ◎保護者とのコミュニケーションが少ない場合でも、議論や発表を行う授業を受けることにより、意思伝達力を補うことができる。
- ◎保護者とのコミュニケーションが少ない場合でも、グループで協力して課題に取り組む授業を受けることにより、意思伝達力や協調性を補うことができる。

1 問題設定

本稿の目的は、保護者とのコミュニケーションや学校の授業形式が、中学生の対人能力にどのような影響を与えているのかについて、明らかにすることである。

学校という場所は、単に勉強をするだけの場所ではない。友だちに会う場と捉えている生徒も多いことが予想される。

渡部（2006）によると、学校生活の中で重要だと思うものを1つだけ選んでもらうと、「友達関係」を選ぶ中・高校生の割合が54.9%と、他の項目（勉強19.0%、人格修養9.6%など）を選ぶ割合よりも非常に高いという結果が出ている。日本の中・高校生にとって、学校内の友だちの持つ意味が非常に大きいということが国内の各種調査からも明らかになっている。

脱近代社会の学校においては、学力以外の

インフォーマルな面も、子どもたちにとって非常に大切なものであると考えられる。特に、中学生は小学生と比べて、部活動などを通して友人と過ごす時間はとても長くなる。そして友人関係の親密さも高まる時期であるため、友人との良好な関係を築くことは、学校に適應するうえでも重要であると考えられる。

では、良好な友人関係を築くうえで必要な対人能力を高めているのは、どのような要因なのだろうか。

まず1点目に考えられる要因は、保護者とのコミュニケーション量である。現代の日本では核家族が多く、近所づきあいも希薄になっており、家庭内における保護者とのコミュニケーションの在り方は、中学生の対人能力に対して非常に大きな影響を与えていると考えられる。

2点目に考えられる要因は、生徒たちが長

い時間を過ごす学校の環境である。特に、一日の最も多い時間を使う授業では、友人と接触する機会が多く、中学生に大きな影響を与えていると予想される。

以上を踏まえ、本稿では、保護者とのコミュニケーションと授業形式が中学生の対人能力にどのような影響を与えているのかを明らかにするとともに、2つの要因の関係性についても明らかにしたい。なお、授業形式は、教師などによって変更が可能な要素でもあるので、その効果を分析することは、教育実践に生かしやすいと考えられる。

2 先行研究の検討

本田（2006）において、従来のメリトクラシーに関する議論では、「学力」に基づいて高校生の中に格差が生じていることが強調されてきたと指摘されている。そして、「学力」達成やそれを通じた将来の地位達成ということが高校生の中で重要性を喪失しつつある現在、そうした従来の格差基準に代わって、対人関係およびそれに関する「能力」という新たな格差基準が浮上しつつあるという点について検討されている。その結果、「対人能力」が高い高校生は、良好な家族関係と高校内での相対的な「学力」の高さ、そして実際の友人数の多さを特徴としているという結果が示されている。

先行研究において良好な家族関係は、家庭内コミュニケーションという指標で示されているが、本稿では最初に、中学生においても保護者とのコミュニケーションが多い生徒ほど対人能力が高いことについて確認する。

ところで、友人関係を構築するうえで必要な対人能力を高めることについて、家庭だけに責任があるとは言いきれないだろう。

秋田（2009）は、深い理解と知識構築により、学力を形成する授業を創造するためには、理解を精緻にする学習が授業で行われることが必要であると指摘している。さらに、協動的に、相互に新たな見方や考え方、知識を共

有するために、多様な生徒の声が教室の中で生かされる授業形態の必要性を示しており、小グループでの協働学習が有効であると述べている。

この先行研究からは授業形態が学力に与える影響について知ることができるが、学力だけでなく対人能力についての分析も必要だと考えられる。そこで本稿では、授業形式が対人能力に与える影響について分析したい。

さらに、保護者とのコミュニケーションが少ない場合でも、授業形式が対人能力を補うことができることを明らかにしたい。また、対人能力については自分の考えを相手に伝える意思伝達力と、誰とでもうまくつきあえる協調性の2つの要素を取り上げて分析を行う。

水原（2009）によると、2008年改定の学習指導要領においては、国際水準のリテラシーとコミュニケーション能力を有し、道徳的資質も高く、「生きる力」に満ちた人間像が示されている。「生きる力」については、表現力の育成や、他人と協調することも目指されており、意志伝達力や協調性に注目することには意義があると考えられる。

3 仮説

以下、仮説について説明する。

- 理論仮説1：保護者とコミュニケーションをとっている生徒ほど、意思伝達力が高い。
- 作業仮説1：保護者とのコミュニケーション得点が高い生徒ほど、自分の考えをはっきり相手に伝えることができる。
- 理論仮説2：保護者とコミュニケーションをとっている生徒ほど、協調性が高い。
- 作業仮説2：保護者とのコミュニケーション得点が高い生徒ほど、嫌いな人、苦手な人ともうまくつきあえている。

理論仮説1・2では、保護者とのコミュニケーション量が多いことが、子どもの友人関

係における対人能力を高めることについて確認する。保護者と会話するなかで、はっきりと自分の気持ちや考えを相手に伝える力が身につくと考えられることが理論仮説1の根拠である。また、保護者と会話を通して、人と双方向に意思の疎通を図ることができるようになり、人とうまくコミュニケーションをとるための基盤も作られると考えられる。したがって協調性が高まるとというのが、理論仮説2の根拠である。

●理論仮説3：議論発表型授業を受けている生徒ほど、意思伝達力が高い。

○作業仮説3：議論をしたり意見を発表しあったりする授業を受けている生徒ほど、自分の考えをはっきり相手に伝えることができる。

●理論仮説4：議論発表型授業を受けていても、協調性には影響がない。

○作業仮説4：議論をしたり意見を発表しあったりする授業を受けている生徒ほど、嫌いな人、苦手な人ともうまくつきあえているとはいえない。

次に、授業形式が対人能力に与える影響について考えたい。子どもたちの対人能力を高めうる授業形式として、本稿では議論をしたり意見を発表しあったりする議論発表型の授業と、グループで協力して調べたり課題を達成したりするグループ協力型の授業について取り上げる。

理論仮説3・4は、議論発表型の授業が対人能力に与える影響についての仮説である。議論発表型の授業を受けることによって、自分の考えを伝達する機会が増え、意思伝達力が増すと考えられる。一方、嫌いな人や苦手な人ともうまくつきあえる協調性は、相互作用や相互理解を必要とする点で、意思伝達力と比較した場合、より相手の意見に対して受容的になる必要がある対人能力であると言えるだろう。議論や発表を行う授業では、自分

から他者へ何かを伝えるという、一方通行に近い意思伝達力は身についても、協調性のような対人能力を高める効果は期待できないと考えられる。

●理論仮説5：グループ協力型授業を受けている生徒ほど、意思伝達力が高い。

○作業仮説5：グループで協力して調べたり課題を達成したりする授業を受けている生徒ほど、自分の考えをはっきり相手に伝えることができる。

●理論仮説6：グループ協力型授業を受けている生徒ほど、協調性が高い。

○作業仮説6：グループで協力して調べたり課題を達成したりする授業を受けている生徒ほど、嫌いな人、苦手な人ともうまくつきあえている。

理論仮説5・6は、グループ協力型の授業が対人能力に与える影響についての仮説である。グループ協力型の授業において、グループワークを円滑に行うためには、各自が自分の意見を言ったり、気持ちを表明したりする必要がある。このため、意思伝達力が高まると考えられる。また、グループで課題に取り組む際には、自分の意見を言うだけでなく、他の生徒の意見をきちんと聞いたうえで、グループとしての方針を決定していくことが不可欠である。グループワークを通して、傾聴力を含めたコミュニケーション能力が形成され、生徒の協調性が高まると予想される。

●理論仮説7：特に保護者とコミュニケーションをとっていない生徒において、議論発表型授業を受けている生徒ほど、意思伝達力が高い。

○作業仮説7：特に保護者とのコミュニケーション得点が低い層において、議論をしたり意見を発表しあったりする授業を受けている生徒ほど、自分の考えをはっきり相手に伝えることができる。

●理論仮説8：特に保護者とコミュニケーションをとっていない生徒において、グループ協力型授業を受けている生徒ほど、意思伝達力が高い。

○作業仮説8：特に保護者とのコミュニケーション得点が低い層において、グループで協力して調べたり課題を達成したりする授業を受けている生徒ほど、自分の考えをはっきり相手に伝えることができる。

●理論仮説9：特に保護者とコミュニケーションをとっていない生徒において、グループ協力型授業を受けている生徒ほど、協調性が高い。

○作業仮説9：特に保護者とのコミュニケーション得点が低い層において、グループで協力して調べたり課題を達成したりする授業を受けている生徒ほど、嫌いな人、苦手な人ともうまくつきあえている。

理論仮説7～9は、対人能力に影響を与えている、保護者とのコミュニケーションと、授業形式という2つの要因の関係性についての仮説である。議論発表型やグループ協力型という授業形式は、保護者とのコミュニケーションが日常的に少ないために、対人能力が低い生徒層に対しては、対人能力を高める効果を持っていると考えられる。しかし、授業形式は、学校において対人能力に影響を与える1つの要因に過ぎない。日常的に保護者と多くコミュニケーションをとって、基本的な対人能力を身につけている生徒たちにとって、さらに対人能力を高めるほどの効果を授業形式に期待することはできないと予想される。したがって、保護者とのコミュニケーション量が少ない生徒においてのみ、授業形式が対人能力を高める傾向があると予想される。

4 変数の設定

①保護者とのコミュニケーション得点

Q44「あなたは、次の話題について保護者とどれくらい話しますか」のA「学校の勉強や進路のこと」、B「保護者の仕事のこと」、C「友だちのこと」、D「遊びや趣味のこと」、E「自分の悩みごと」、F「あなたの幼いころのこと」、G「恋愛のこと」の7項目について、「よく話す」を1点、「ときどき話す」を2点、「あまり話さない」を3点、「ほとんど話さない」を4点として加算し、29点から引いたものを保護者とのコミュニケーション得点とした。10～22点を得点が高い層、1～9点を得点が低い層として分析した。なお、アルファ係数は0.794である。

②協調性

協調性の指標として、Q18A「嫌いな人、苦手な人ともうまくつきあえている」を用いた。「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の回答を「あてはまる」、「あまりあてはまらない」と「まったくあてはまらない」の回答を「あてはまらない」に2分類した。

③意思伝達力

意思伝達力の指標として、Q18C「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」を用いた。「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の回答を「あてはまる」、「あまりあてはまらない」と「まったくあてはまらない」の回答を「あてはまらない」に2分類した。

④議論発表型授業

議論発表型授業の指標として、Q05A「議論をしたり意見を発表しあったりする授業」を用いた。「ほとんどすべて」「半分より多い」「半分くらい」の3つの回答を「半分以上」、「半分より少ない」と「まったくない」の回答を「半分未満」に2分類した。

⑤グループ協力型授業

グループ協力型授業の指標として、Q05C「グループで協力して調べたり課題を達成したりする授業」を用いた。「ほとんどすべて」「半分より多い」「半分くらい」の3つの回答を「半分以上」、「半分より少ない」と「まったくくない」の回答を「半分未満」に2分類した。

5 分析

以下、仮説にそって分析を行う。

最初に度数分布について確認する。表1をみると、Q18C「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」に「あてはまる」（とても十まあ）と回答した生徒が57.1%であるのに対し、Q18A「嫌いな人、苦手な人ともうまくつきあえている」に「あてはまる」（とても十まあ）と回答した生徒は52.2%であった。このことから、中学生にとって意思伝達力より協調性のほうが、得るのがやや難しい対人能力だと考えられる。前述したように、協調性が意思伝達力よりも相互作用や相互理解を必要とすることが、この理由だろう。

次に、作業仮説1と作業仮説2を検証する。

表2より、作業仮説1「保護者とのコミュニケーション得点が高い生徒ほど、自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」は支持された。保護者とのコミュニケーションを通して、意思伝達力が身につくことがわかった¹⁾。

また、表3より、作業仮説2「保護者とのコミュニケーション得点が高い生徒ほど、嫌いな人、苦手な人ともうまくつきあえている」は支持された。保護者との会話により、人とコミュニケーションをとるための基盤が作られ、協調性が高まることわかる²⁾。

次に、作業仮説3と作業仮説4について検証する。

表4より、作業仮説3「議論をしたり意見を発表しあったりする授業を受けている生徒ほど、自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」は支持された。議論発表型授業を受けることによって、自分の意思や考えを他の生徒に伝達する機会が生じ、意思伝達力が増すことがわかる³⁾。

また、表5より、作業仮説4「議論をしたり意見を発表しあったりする授業を受けてい

表1 意思伝達力と協調性の度数分布

	Q18C・Q18A				合計	N
	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない		
意思伝達力 (%)	16.8	40.3	35.3	7.7	100.0	(2894)
	57.1		43.0			
協調性 (%)	7.2	45.0	34.9	12.9	100.0	(2894)
	52.2		47.8			

表2 保護者とのコミュニケーション得点×意思伝達力

保護者とのコミュニケーション得点	意思伝達力		合計	N
	あてはまる	あてはまらない		
高い (%)	62.7	37.3	100.0	(1483)
低い (%)	50.8	49.2	100.0	(1310)
合計 (%)	57.1	42.9	100.0	(2793)

0.1%水準で有意 p=0.000

表3 保護者とのコミュニケーション得点×協調性

保護者との コミュニケーション得点	協調性		合計	N
	あてはまる	あてはまらない		
	高い (%)	58.8		
低い (%)	45.2	54.8	100.0	(1312)
合計 (%)	52.4	47.6	100.0	(2799)

Q 44A~G× Q 18A
0.1%水準で有意 p=0.000

表4 議論発表型授業×意思伝達力

議論発表型授業	意思伝達力		合計	N
	あてはまる	あてはまらない		
	半分以上 (%)	59.3		
半分未満 (%)	55.2	44.8	100.0	(1485)
合計 (%)	57.1	42.9	100.0	(2834)

Q 05A× Q 18C
5%水準で有意 p=0.026

表5 議論発表型授業×協調性

議論発表型授業	協調性		合計	N
	あてはまる	あてはまらない		
	半分以上 (%)	52.8		
半分未満 (%)	51.7	48.3	100.0	(1486)
合計 (%)	52.2	47.8	100.0	(2839)

Q 05A× Q 18A
有意差なし p=0.562

る生徒ほど、嫌いな人、苦手なともうまくつきあえているとはいえない」は支持された。議論発表型授業では、受容的に人の話を聞き、より相互理解を必要とする対人能力である協調性については、高めることができないことがわかった⁴⁾。

次に、作業仮説5と作業仮説6について検証する。

表6より、作業仮説5「グループで協力して調べたり課題を達成したりする授業を受けている生徒ほど、自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」は支持された。グル

ープ協力型授業においては、少人数で課題に取り組み、各自が自分の意見を言ったり、気持ちを表明したりする機会も多くなる。このため、意思伝達力が高まると考えられる⁵⁾。

また、表7より作業仮説6「グループで協力して調べたり課題を達成したりする授業を受けている生徒ほど、嫌いな人、苦手なともうまくつきあえている」は支持された。グループ協力型授業では、自分の意見を言うだけでなく、他の生徒の意見や考えを聞く力も必要となり、協調性が高まると考えられる⁶⁾。

次に、作業仮説7～9について検証する。

表6 グループ協力型授業×意思伝達力

Q 05C× Q18C

グループ協力型 授業	意思伝達力		合計	N
	あてはまる	あてはまらない		
半分以上 (%)	59.8	40.2	100.0	(1638)
半分未満 (%)	53.5	46.5	100.0	(1174)
合計 (%)	57.1	42.9	100.0	(2812)

1%水準で有意 p=0.001

表7 グループ協力型授業×協調性

Q 05C× Q18A

グループ協力型 授業	協調性		合計	N
	あてはまる	あてはまらない		
半分以上 (%)	54.1	45.9	100.0	(1642)
半分未満 (%)	49.7	50.3	100.0	(1176)
合計 (%)	52.3	47.7	100.0	(2818)

5%水準で有意 p=0.019

表8 保護者とのコミュニケーション得点×議論発表型授業×意思伝達力

Q 44A~G×Q05A× Q18C

保護者との コミュニケーション得点	議論発表型 授業	意思伝達力		合計	N
		あてはまる	あてはまらない		
高い	半分以上 (%)	62.6	37.4	100.0	(730)
	半分未満 (%)	62.8	37.2	100.0	(742)
	合計 (%)	62.7	37.3	100.0	(1472)
有意差なし p=0.937					
低い	半分以上 (%)	55.3	44.7	100.0	(582)
	半分未満 (%)	47.5	52.5	100.0	(716)
	合計 (%)	51.0	49.0	100.0	(1298)

1%水準で有意 p=0.005

表8より、作業仮説7「特に保護者とのコミュニケーション得点が低い層において、議論をしたり意見を発表しあったりする授業を受けている生徒ほど、自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」は支持された。保護者とよくコミュニケーションをとっている層においては有意な結果にならず、議論発表型授業を受けても、意思伝達力が上がるとは言えない。一方、保護者とコミュニケーションをとっていない層においては、議論発表

型授業を多く受けた生徒のほうが、そうでない生徒に比べて、意思伝達力が高い。家庭において保護者とあまり話していない場合、議論発表型の授業形式によって、意思伝達力を補うことができることをこの結果は示していると言える。

表9より、作業仮説8「特に保護者とのコミュニケーション得点が低い層において、グループで協力して調べたり課題を達成したりする授業を受けている生徒ほど、自分の考え

表9 保護者とのコミュニケーション得点×グループ協力型授業×意思伝達力

Q 44A~G×Q05C×Q18C					
保護者との コミュニケーション得点	グループ協力型 授業	意思伝達力		合計	N
		あてはまる	あてはまらない		
高い	半分以上 (%)	64.6	35.4	100.0	(879)
	半分未満 (%)	60.4	39.6	100.0	(584)
	合計 (%)	63.0	37.0	100.0	(1463)
有意差なし p=0.105					
低い	半分以上 (%)	54.0	46.0	100.0	(720)
	半分未満 (%)	46.7	53.3	100.0	(568)
	合計 (%)	50.8	49.2	100.0	(1288)
1%水準で有意 p=0.009					

表10 保護者とのコミュニケーション得点×グループ協力型授業×協調性

Q 44A~G×Q05C×Q18A					
保護者との コミュニケーション得点	グループ協力型 授業	協調性		合計	N
		あてはまる	あてはまらない		
高い	半分以上 (%)	59.3	40.7	100.0	(882)
	半分未満 (%)	58.3	41.7	100.0	(585)
	合計 (%)	58.9	41.1	100.0	(1467)
有意差なし p=0.701					
低い	半分以上 (%)	48.5	51.5	100.0	(721)
	半分未満 (%)	41.1	58.9	100.0	(569)
	合計 (%)	45.3	54.7	100.0	(1290)
1%水準で有意 p=0.008					

をはっきり相手に伝えることができる」は支持された。保護者とよくコミュニケーションをとっている層においては有意な結果にならず、グループで協力して課題に取り組む授業を受けても、意思伝達力が上がるとは言えない。保護者とコミュニケーションをとっていない層は、グループ協力型授業を多く受けていることで意思伝達力が高くなると考えられる。保護者とあまり話していない場合、グループ協力型の授業形式によって、意思伝達力を補うことができることがわかる。

表10より、作業仮説9「特に保護者とのコミュニケーション得点が低い層において、グループで協力して調べたり課題を達成したり

する授業を受けている生徒ほど、嫌いな人、苦手な人ともうまくつきあえている」は支持された。保護者とよくコミュニケーションをとっている層は、グループ協力型授業を受けても、協調性が上がるとは言えない。保護者とコミュニケーションをとっていない層においては、グループで協力して課題に取り組む授業を多く受けている生徒のほうが、そのような授業を受けていない生徒に比べて、協調性が高いことがわかる。家庭において保護者とあまり話していない場合、グループ協力型の授業形式によって、作業仮説8で検証した意思伝達力と同様に、協調性も補うことができることがわかった。

6 結論

理論仮説1・2より、保護者とのコミュニケーションは、中学生の友人関係における対人能力（意思伝達力・協調性）にプラスの影響を与えていることが確認された。

作業仮説1・2において、対人能力に関する他の指標として、信頼関係構築力（Q18B「友だちから悩みを打ち明けられることが多い」）や、リーダーシップ（Q18D「自分には人を引っばっていく力がある」）を従属変数とした場合にも、0.1%水準で有意な結果となる。これらの結果を踏まえても、家庭内において保護者とコミュニケーションをとることは、中学生の対人能力の基盤を築くうえで、非常に重要であることがわかる。

また、理論仮説3～6からは授業形式が対人能力に与える影響が明らかになった。議論発表型の授業には、意思伝達力を高める効果がある。そして、グループ協力型の授業については、意思伝達力だけでなく、協調性を高める効果もあるのである。

意思伝達力は、相手に自分の考えを伝えるという、コミュニケーションの基本的な部分である。一方で、協調性は、相手の考えをくみ取ったうえでさらに自分の意思を伝えるという相互理解や相互作用を必要とするものであり、傾聴力などを含めたコミュニケーション力のうえに成り立つ、より難しい対人能力であるといえる。意思伝達と協調性に関しては対人能力としてひとくくりにするのではなく、分けて考えていくことに意義があることが今回の分析からわかった。

議論や発表を行う授業だけは、意思伝達力というコミュニケーションにおける基本的な力を身につけることしかできず、協調性のよ

うな対人能力を身につけさせるうえでは、グループで協力して取り組む授業を取り入れることが必要であると考えられる。

理論仮説7～9からは、授業形式が、保護者とのコミュニケーションによって高まる対人能力を補う効果を持っていることがわかった。保護者とあまり話をしていない層においてのみ、授業形式は対人能力を高める効果を持っている。保護者と普段からコミュニケーションをとり、対人能力が身につけている生徒に対しては授業形式による効果を見出すことはできなかった。しかし、このことは、生徒の対人能力について学校が家庭の働きを補完しようという関係にあることを示しているといえるだろう⁷⁾。

以上から、本稿を通して次のようなインプリケーションを示すことができる。

中学生の友人関係における対人能力を高めるうえでは、保護者とのコミュニケーションは重要である。しかし、学校における授業形式はそれを補える可能性がある。したがって学校ではグループで協力する授業や、議論や発表を行う授業形式を積極的に採用することに意義があると考えられる。

教師の多忙が指摘されている中、講義形式ではない形式の授業を行うことは容易なことではないかもしれない。しかし、子どもの教育の責任を家庭に押しつけないためにも、学校による取り組みは不可欠となるだろう。

最後に、本稿の問題点としては、対人能力に影響を与える学校環境として授業形式のみに着目している点あげられる。今後は、教師の働きかけや、行事、部活動などの様々な学校要因についてさらに分析していく必要があるだろう。

〈注〉

- 1) 対人能力に関しては一般的に男女でその傾向が異なることが知られている。したがって、補足的に性別による違いも見していきたい。男女別にみた場合、男子が0.1%水準、女子が1%水準でそれぞれ有意である。保護者とのコミュニケーションは、男女ともに意思伝達力を高めることがわかる。
- 2) 男女別にみた場合、男女ともに0.1%水準で有意であり、保護者とのコミュニケーションは男女ともに協調性を高めることがわかる。

- 3) 男女別に見た場合、男子については10%水準であるが有意、女子については有意差なし ($p=0.164$) となった。男子のほうが、議論や発表をする授業によって意思伝達力が高まりやすい傾向にあるといえる。男子のほうが女子よりも積極的に発言をすることにより、女子の発言回数が減ってこのような結果がでたのかもしれない。
- 4) 男女別に見ても、男子 $p=0.167$ 、女子 $p=0.476$ となり、男女ともに有意差はなく効果は期待できない。
- 5) 男女別に見た場合、男子については有意差なし ($p=0.219$)、女子については0.1%水準で有意となった。女子のほうが、グループ協力型授業によって意思伝達力が高まりやすい。このことは、男子のほうが議論発表型授業によって意思伝達力が高まりやすいという前述の結果と対照的である。このような関係が得られた理由の考察は今後の課題としたい。
- 6) 男女別に見ると、男女どちらも10%水準であるが有意であり、男女ともに効果が期待できる。
- 7) なお、階層を統制しても、保護者とのコミュニケーション量・授業形式・対人能力の三者関係はほとんど変わらなかった。したがって、階層が上位でも下位でも、授業形式は家庭内のコミュニケーションを補うことができると考えられる。

<引用文献>

- 秋田喜代美、2009、「授業改革への方向——質の時代における学力形成」東京大学学校教育高度化センター編『基礎学力を問う——21世紀日本の教育への展望』東京大学出版会、193-233。
- 本田由紀、2006、「対人関係と高校生活・進路選択」石田浩編『高校生の進路選択と意識変容』東京大学社会科学研究所、71-80。
- 水原克敏、2009、「現代日本の教育課程の歩み」田中耕治・水原克敏・三石初雄・西岡加名恵『新しい時代の教育課程（改訂版）』有斐閣、45-106。
- 渡部真、2006、『現代青少年の社会学——対話形式で考える37章』世界思想社。